説教20220123アモス3：1-8マタイ4：12-23「イエスのなさったこと。」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

皆さん、束縛という言葉を聞いて何を思われるでしょうか。今の世で殊に若い世代の方ならば、間違いなく、男女の関係で、恋愛感情が行き過ぎて、お互いを縛り合う辛い状態などのことを思い浮かべることと思います。又は、親と子の関係で、過度に依存し合って、これも又縛り合ってしまう状態のことを思われるかも知れません。この両者に共通しているのは、どちらも人と人との２者関係であるという事です。関係性の始まりともいうべき２者関係において、今の世では束縛という事が起き、そして語られているのです。

ところが、時代をさかのぼってみますと、一昔前までは、そうではありませんでした。束縛という言葉を、漢字の字義通りひも解いてみますと、それは、束ねるという語と縛るという語から成っています。つまり、多くの人が束ねられて縛られるという意味合いです。そして、昔は、そういった意味合い通りのことを、この束縛という言葉で表現し、語っていたのです。例えば、戦前ですと、「我々は、条例の改正によって言論及び集会の自由を束縛された」などと語られましたし、戦後ですと「国民の自由を束縛するな」と言ってそれこそ、多くの人々が束になって、国家に対して叫んだのでありました。このように、一昔前までは、束縛というのは、例えば、国家と人々の間ですとか、或いは学校と生徒の間ですとか、共同体と集団との間で起こり語られる出来事だったのでした。それが、今や、人と人との２者関係にまで、煮詰められて来た感があります。

この変遷は一体何なのでしょうか。それは、この世に良くも悪くも張り巡らされていた、人間関係の網といったようなものが失われていったからなのではないかと思わされます。一昔前は人間関係の網は、隣近所等にも張り巡らされ、また親類縁者の間にも広く張り巡らされておりました。それで、束縛という事は、多くの場合、人間の束と束のあいだで起って、それが様々な不自由をもたらしている、とみんな考えていたわけです。だから、束縛に対しては、昔は、徒党を組んで団体交渉とするといったことをよくしたのでありましょう。

今は、それが２者関係と言った非常に狭い場所に煮詰まってしまっていますので、そこにある束縛の苦悩は、一昔前のそれとは比較にならないくらい深いものとなっているのではないでしょうか。

冒頭になぜ束縛の話をしたかと言いますと、イエス様のなさったことは、私たちを束縛から解放されたことだ、と言えるからです。イエス様は、束縛されて苦しんでいる私たちに、解放を宣言されたのです。あなたは自由ですよ、と告げ知らされたのです。その最たるものが、死からの解放であります。私たちはイエス様の言葉によって、死から解放され、よみがえりの命を頂くことになっています。

今日の聖書箇所では、捕らえられるという事が多く語られます。アモス書では獲物という言葉で囚われの身となっているイスラエルの人々が言い表されています。又、マタイ福音書では、洗礼者ヨハネは捕らえられ、網は湖で魚を捕えていました。

イエス様は、いつの時代も何かに囚われ束縛されている私たちを、自由にし解放するため、最後には、死からも解放して下さるために、私たち一人一人のところに来て下さいました。では、イエス様は、どのようにして、私たちを解放して下さるのか、その出来事を、今日のマタイ福音書から見て参りたいと思います。

今日のマタイ福音書は、「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、」という出だしで始まります。それから、色々な地名が記され、イエス様はそこここを巡って、「悔い改めよ、天の国は近づいた」と述べ伝え始められたのです。つまりイエス様の宣教は、ヨハネが捕らえられたことを契機として、始められたのです、なぜかといいますと、この「悔い改めよ、天の国は近づいた」という言葉は、ヨハネが牢に囚われる前にそっくりそのまま、語っていた言葉だったからです。イエス様は、ヨハネができなくなった役割をこの時に引き継がれたのです。

そうして、イエス様は、ガリラヤ湖のほとりに差し掛かり、まず、シモンとアンデレの兄弟に会いました。この出会いは、はじめてのことではなかったようです。彼らはこの前にもイエス様と２，３回、顔を合わせたことがあるらしいです。イエス様はこの時、彼らに対してどのような言葉を言われたかというと「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」という言葉でした。これがシモンとアンデレに与えられた恵みの御言葉でした。これを聞いた二人はもちろん、喜んで、すぐに網を捨ててイエス様に従ったのでした。もちろんイエス様は人の心を全てお見通しで、喜んでついて来る人でなければこのような声掛けをなさらないのでありますが、喜んでついて来るこの二人は、この時、イエス様に選ばれて、イエス様に従う者とされたのでした。

処で、この「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」というイエス様の言葉は、束縛そのものだと思います。言葉を変えていえば、私たちはイエス様の言葉に捕らえられるのであります。ここに福音の大転換が示されているしょう。イエス様の御言葉は、確かに、私たちを全ての束縛から解放すること、最後には死からも解放してくれる、実に恵みの御言葉であります。しかし、その御言葉に出会った当初は、解放するどころか、私たちを束縛すること以外のない者でもないのです。（ここら辺に、今の世にイエス様の福音が浸透していかない一因があると思いますが、よく考えますと、私たちは、自ら自由を！自由を！と叫んでいても、いつまでも自由は得られないばかりか、ますますその束縛の辛さがいや増してくるという、その原理に、はやく気づく方が幸せであります。）

私たちは、イエス様の御言葉に捕らえられ束縛されて、こそ幸せになれます。どうか私たちがこのことを広く共に信じることが出来ますように。

冒頭で人間関係の網という表現をしましたが、イエス様に捕らえられる、という事の有様は、網という言葉を用いれば、明らかになってきます。シモンとアンデレはそれまで、網を使って、魚をとっていました。魚を取るにも、網を使って一網打尽にするのと、釣竿を使って一匹一匹を釣りあげるのとでは、ずいぶん趣が違います。趣味で魚を取る人ならば、まず、網を使うことはないでしょう。いかがでしょうか。

それで、イエス様が、彼らに言った「人間をとる漁師にしよう」という言葉は、その文脈からして、網で人間を取る漁師にしようという事に違いありません。決して、一本釣りで人間を取るというような意味合いではないのです。この網で人間を取るという事には多くの意味が込められています。まず、私たちは一人で、ではなく、多くの人たちと力を合わせて、共に働いて、人間をとっていく、ルカによる福音書では、すなどっていくと言い表されていますが、そうして人間をすなどって行くのです。そして、網は、私たちをその中に入れて、今とは違う世界へ運んでいくことになるでしょう。そこには、私たちの努力とか工夫をはるかに超えた力が働くことでしょう。但し、その網を引き揚げるタイミングは、全く人間があずかり知らないというわけでもないのです。

そもそも旧約聖書においては網というのは悪い物として語られていました。今日の招きの言葉は、「死の波がわたしを囲み／奈落の激流がわたしをおののかせ　陰府の縄がめぐり／死の網が仕掛けられている。」ということで、救いどころか、黄泉に連れていかれるような死の網のことが語られていますが、これが旧約聖書における網の共通認識だったのです。でもここでも福音の大転換が起こり、イエス様の御言葉にかかれば、そんな死の網であっても、それが清められ、かえって私たちを天の国へと運ぶ網として生まれ変わって用いられるのであります。そうして、漁師の網は捨てられて、イエス様に清められた網は、私たちを御言葉によって繋いでいって、いつしかそこには喜びの人間関係の網が張り巡らされることになるでしょう。

（私事で恐縮ですが、私も、洗礼を受けてから、この喜びの人間関係の網という事を実感させられたことが多々あります。例えば、私が、どうしてもある人に福音を伝えたいと思って頑張っていたら、その私の努力は実らなかったけれども、その努力する姿を垣間見た人が、クリスチャンになったといったようなことが起こりました。）

さて、次にヤコブとヨハネという兄弟のことが語られます。この兄弟は船の中で、父親と一緒に網の手入れをしていました。父親を含めたこの３人は、協力して網の手入れをしていたという事は大切です。この３人の間には長年、仕事を共にした切っても切れない人間関係の網と言ったようなものが形作られていたことでしょう。その親子関係が良好であったどうかはわかりませんが、ともかくこの親子は長年培ってきた関係の中で、生活を共にしていたのでした。そして、網の手入れをしていたという事は、彼らが、網を大切に扱っていたことを示しています。この世的には、何一つ咎め出てすることがない、むしろ褒められるべき人間関係がここには描かれているようです。ところがそこに、イエス様がやってきて御言葉を語って、この兄弟もすぐに、舟と父親とを残して、イエス様に従ったのでした。この場面に、人間的な思いや感情からすると、割り切れない思いを残す方がいるかも知れません。しかも、この訳では「舟と父親とを残して」となっていますが、実はこの残してというギリシャ語の動詞は、少し前に出てくる「網を捨てて」の捨てて、と同じ動詞なのです。「舟と父親とを捨てて」となれば、もうこれはどういわれても受け入れられないというお方も出てくるかも知れませんが、どうか私たちはイエス様の御言葉に静かに耳を傾けたいと思います。

イエス様は、彼らが湖で魚を取る網よりも、比べ物にならない程、よい網を、彼らに示されました。それは、人々を捕えることができる、御言葉という網であります。この時、ヤコブとヨハネの兄弟はその御言葉に捕らえられてイエス様に従う者とされました。しかし、父親のゼベダイはその網にかかりませんでした。なぜなら彼には、まだその時ではなかったからです。でもイエス様の御言葉の網は計り知れなく広く、私たちを覆ってくるでしょう。やがて父親ゼベダイもその網にかかる時が来るでしょう。私たちは、イエス様の御言葉の網を信頼して、その網をなげうつという営みにたゆまず従事していきたいと願います。

最後に、マタイ福音書 13章 47節をお読みします。

「また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。」

お祈りします

天の父

私たちは、このコロナ渦にあって、会うことがままならなくされ、人間関係の網の目から抜け落ちたような、寄る辺ない時を過ごしています。どうか、この時に、あなたの御言葉の網によって私たちを救い上げ、繋ぎ止めて下さい。又、天変地異も多発し、私たちは怯えています。どうか私たち一人一人をあなたが繋ぎ止めて、平安と癒しをお与えください。

どうか私たちを教会に集めて下さい。今、この教会の会堂に来られない方々も、あなたがとこしえに治めておられます天の教会にあって、ともに心を高く上げて、あなたを賛美していくことが出来ますように、私たちを励まし、整え導いて下さい。

父と聖霊と共に一体であって